松江藩における御大工の位置付けとその推移

(松江藩御作事所と御大工の作事に関する研究 その2)

ON THE RANKS AND GENEALOGY OF THE MATSUEHAN-ODAIKU

A study on the "Matsuehan-Osakujidokoro" and the works of "Odaiku" Part 2

和田 嘉宥*

Yoshihiro WADA

We have a source book "Osakujidokoro-Oyakuninchou" on the personnel changes in the officials or the carpenters who worked for Osakujidokoro.

In this study, first of all, the writer tells the ranks of the Odaiku in the Osakujidokoro according to the "Osakujidokoro-Oyakuninchou" and the "Kyuhanjiseki-Sitakosirae".

Next, the writer confirms the ranks of the Odaiku in the Edo period.

Lastly, the writer tells the genealogy of the Matsuehan-Odaiku.

Keyword: Matsuehan, Osakujidokoro(the office of constructive), Odaiku(master carpenter), ranks, genealogy, changes

松江藩、御作事所、御大工、位置付け、系譜、推移

1. はじめに

松江藩には作事を扱う役所として御作事所があり、御作事所に勤める大工職や役人の変動を記した史料に『御作事所御役人帳』¹ (以下『帳』と記す)が現存する。前稿²では『帳』の記載内容を検討し、この史料が近世における御大工の系譜とその推移を伝える貴重な史料であることを明らかにし、続いて『帳』を基礎史料として御作事所の人員構成とその変遷を辿り、御作事所の員数と活動状況との対応を検証した。また、御作事所が関与した作事について検討を加え、松江藩御作事所の作事が、城内の維持管理のみに留まらず、藩内の寺社建築の修造や建造、橋の掛け替え、さらには幕府の普請手伝いと多岐に渡っていることを確認した。

本研究は、地方における作事組織の実態と組織形態を具体的に検証し、御大工の活動と推移を明らかにできるところに特色があると考えているが、本稿では、まず最初に松江藩御作事所における大工職の位置付けを明らかにし、続いて、御作事所の役職と格式との関係を確認する。さらに、松江藩御作事所において中心的存在となっていた御大工について、その系譜を幾つか追跡することによって、御大工の推移の一端を明らかにし、松江藩御大工の特色を考察したい。

2. 松江藩御作事所の特色³

松江藩に関する記録史料として「雲州松平家文書」があり、その一つ『旧藩事蹟調査下按』⁴ (以下『下按』と記す)の内、『五之拾壹』に御作事所に関する記述があるが、その内容は次の通りである。

十一御作事奉行 是レハ定員三名 内老名ハ江戸勤番ありし外ニ添奉行先ツハ二名 内一人ハ多く御大工ト申シテ元親代ヨリ其職に従事 御大工頭トナリ御徒格ニモ進ミ常ニ何モ心得居て后新番士ニ取立られ調方トカ押合トカ それに此御作事所ニハ破損方或ハ修理方の名アリテ 是ホ作事奉行ニテ兼勤之為メニハ間ニハ破損方添奉行又ハ修理方添奉行ニテ 遂ニ御譜代士御留守居番組ヘ組入 全ク添奉行と又繰上げの末 此役組外ニ進ミ本奉行ニ被仰付モノ 是迄続々ありし

元来御作事所ト申シ 新規御国にての御普請ト云ヘハ 御九代齊貴公の御隠居後の御住居 元御花畑内ニ御新築ニナリし 観山御殿トカ其後新御殿ト申シテ 元御鷹部屋跡ヘ若殿様御殿力建築セラレシトカ 其前文武入交セの稽古所則修造館トカ習兵所ヲ開カレ 幾分建物力出来タト申ス 凡ソ五六十年以来の御普請ケ所ヲ記セハ如斯其他修繕 官の手懸り場所トナレハ 諸役所 旧の諸稽古場 従来大橋の架橋 橋々修繕トテ 江戸御屋敷ハ別段勤番もあり 京大坂の屋敷ニセヨ 御普請トナレハ一切此御作事所の掌る所

尚 破損方寺社修理方トカ其区別あり 尤杵築御造営トテ藩の関係なきにあらざるコト役所にニハ 計吏ハ普通内改以下元ノ下役人ハ申迄もなく 外ニ御大工御左官又城普請の者トカ 皆作事支配之者も有りて夫々従事 前記御大工頭となりての添奉行又ハ本奉行ニ進ムモノハ普通の奉行ト違ひ其道に委しけれハ 職人ニモ手技力出来ぬ

以下御大工ホニハ時宜ニよつてハ 自身ニ鋸切り鉄槌を取りてヤリて見せる そこハ大に用ゆる所 間にハ夫れ者其もの居て取引する故ニハ 職人も頭あからさる事も可有之、併セ此儀愛ニ記置クヘシ

* 米子工業高等専門学校 教授

Prof., Dept. of Architecture of Yonago National College of Technology

『下按』は松江藩軍用方書役重村俊介が幕末における松江藩の様子を多岐に渡って記録したもののだが、江戸時代末期における松江藩御作事所の特色と御大工の働きがよく分かる。以下、『下按』記載内容の要点を示す。

- ・作事奉行の定員は3名で、内1人は江戸勤番となる。
- ・添奉行は2名で、内1人は御大工から取立られる。御大工は御大工頭となり御徒になり、さらに添奉行になり新番士となる。
- ・添奉行から本奉行になり組士となり、さらに役組外になる者も少なくない。
- ・御作事所の仕事は、城内の建物（藩主隠居後の住居、若殿の住居）、廊外に設ける新規の藩の建物（修道館）などの普請が主で、その他は、役所、大橋などの橋の修繕があった。
- ・江戸屋敷には江戸勤番が置かれた。
- ・破損方、寺社修理方も置かれた。
- ・杵築大社造営も御作事所にとって重要な任務だった。
- ・役所には、事務系として計吏を扱う内改、元ヰ、下役人等が、技術系として作事支配の御大工、御左官、城普請等が置かれた。
- ・御大工は、鋸などの大工道具の扱いは優れており、その道によく通じており、職人達も御大工には一目おき、仕事にも手抜きが出来かねた。

3. 御作事所の構成と御大工の位置付け⁵

さて『帳』をめくると、天明5年(1785)までは御大工を中心に召抱（登用）をはじめ移動のあった人名とその役職等しか記載されていない。これに対して天明6年(1786)以降の『帳』は、御作事所に勤める作事奉行・御役人・御大工・城普請等の人名が全て記載されており、その年の御作事所の全容を知ることができる。

天明6年の『帳』によって松江藩御作事所の陣容をまとめると、表-1⁶となる。

ここでは、天明6年の『帳』によって御作事所の構成要員について確認し、役職と格式の相互関係についても考察を加える。

当時の御作事所の員数は凡そ70名⁷である。作事奉行が御作事所を統括し添奉行2名がそれを補佐している。その下に調役・内改・横目・元ヰ・役人・御大工頭・御大工・御大工並・御左官等が配置されている。大工職の勤めは普請所が主体であるが、他に破損方、詠物小繕御急手方外方があり、江戸勤番もあった。城普請が16名となっているが、これら城普請は城普請小頭の指揮下にあって、その役目は「道具方、御破損方、御急手詠物外小繕方、左官壁土趣向、御作事所破損方御普請所損見廻」等であったことが分かるが、多くは御大工、御左官等の補佐役だったと見える。江戸勤番（詰）には、添奉行1名、御大工頭1名、御大工1名、城普請1名が配置されていたことも分かるが、御作事所にとって江戸勤番（詰）は重要な勤めだったと思われる。

松江藩でも格式は表-2のように士分と徒以下（卒分）に二分されている。御作事所では、奉行・添奉行の格式は役組外、新番士と並士（士分）で、御大工頭はじめ大工職等の格式は卒分つまり徒以下であることが分かる。

なお松江藩の場合、大工職から添奉行、さらに奉行になる者がいるが、天明6年(1786)の『帳』に記されている添奉行斎田彦吉、内藤領左衛門の二人は何れも御大工からの登用である。

斎田彦吉は、延享4年(1741)見習として御作事所に入り、宝暦元年(1751)に親彦四郎の跡を継ぎ御大工になる。その力量が認められたのだろう、翌2年には御大工頭となり、安永2年(1773)に添奉行に、天明9年(1789)には作事奉行になっている。

また、内藤領左衛門は、寛保2年(1741)に御大工並となり、宝暦3年(1751)に御大工になる。同11年(1761)には御大工頭となり、天明3年(1783)に添奉行になっている。

表-1 松江藩御作事所の陣容一覧（天明6年）

役職	数	格 式	備 考
奉行	1	役組外	破損方、寺社修理方兼
添奉行	2	新番組士	内江戸勤番1
調役	1	新番組士	
内改	1	御目見格	
横目	6	御徒1、御徒並1 小算用1、萬役人3	
元ヰ	3	萬役人3	内江戸勤番1
添元ヰ	1	先手組	
御大工頭	5	御徒1、御徒並4	内江戸勤番1
御大工	7	御目見格	普請所勤4、破損方勤1、 江戸勤番1、その他1
御大工並	3	譜代格	普請所勤
御大工見習	3	無給	御大工頭俵1、御大工俵2
御左官	2	御大工と同格	
御役人	2	御目見格1、譜代格1	
城普請小頭	1		
城普請	16	取立物	内江戸詰1
古物方	5	萬役人1、先手組1、浮組1、 同心組1、城普請組1	
詠物小繕御	3	浮組1、先手組1、 城普請組1	
急手外方	6	御小人	
小夫	1		
鍛冶	1		
橋大工棟梁	1		

表-2 松江藩の格式⁸

士分の格式	卒分（徒以下）の格式
（ 家老	徒
上 家老並	徒並
士 中老	御目見
（ 家老嫡子	小算用
	萬役人
（ 番頭	譜代組足輕
目付・歩行頭	浮組足輕
並 使番	犬牽、先手組、同心組他
側役	新組足輕
士 組外	杖付、城普請、水主他
役組外	取立物
（ 扨從番組士	中間以下
大番組士	中間、百人者、小人他
留守居番組士	
新番組士	

4. 御大工の推移

御大工の推移を辿ると、技倆のある者は、前述した斎田彦吉、内藤領左衛門のように、御大工並から御大工へ、さらには添奉行、

表-3 寛延15年召抱御大工の系譜

年 号	竹内有兵衛	上田作太夫	上坂次郎左衛門	馬場助右衛門	水谷五郎兵衛	竹内小右衛門	森川甚左衛門
寛永15 1640	大工 10人扶持	大工	大工	大工	大工	大工	大工
正保							
慶安			(次郎左衛門倅) 見習			(捨皮御大工伊助) 大工	
承応 明暦		(六太夫) 見習		大工			大工
万治 寛文 1660		大工 (六太夫)		大工	大工		
1670							
延宝	大工						
天和 1680							
貞享			大工				
元禄 1690	目見頭 徒並	目見頭 (権六) 見習 減し		大工	大工	役人 (権三郎) 大工	
1700			頭		目見 (丹七) 見習 大工 (丹七事五郎兵衛)		
宝永	(?)						減し
1710	徒元	徒並	目見		頭 (勘右衛門)	(次右衛門) 見習 (笠井卜改)	
享保	奉行		徒並 徒並 (奎兵衛)		徒並 徒並		
1720		元	目附	大工	徒並	大工 (笠井次右衛門)	
1730							
天文		奉行	元	目見	内改		
寛保 1740				(市之丞後弥平太)		(笠井喜文太) 無給 大工	
延享							
寛延 宝暦 1750							(笠井政四郎) 大工 減し
1760				(助右衛門) 頭助ケ 江戸 筆頭 病死 (佐々右衛門) 大工			
明和							
1770							
安永							
天明 1780				江戸			
寛政 1790				筆頭 (此八) 無給見習			
1800							

そして本奉行へと昇進しているのが分かる。ここでは、御大工の系譜を辿り、御大工の家系がどのように推移しているか確認し、松江藩における御大工の推移の特色を明らかにしたい。使用した史

料には『御作事所御役人帳』以外に『列士録』⁹がある。

1) 寛永15年召抱御大工とその系譜¹⁰

寛永15年、松平直政入部に伴い来松した御大工は7人いる。

まず、これら御大工7人とその子孫の推移を辿ってみたい。以下、御大工7人とその子孫の動向の概要を記す。表-3はその推移をまとめたものである。

竹内有兵衛¹¹は寛永7年(1629)に江戸で仕え始め¹²ている。出雲入国前、紀州家に召抱えられる約束もあったが、それを反古にし、寛永15年(1638)から松江藩御大工頭となる。慶安2年に江戸で「西御丸御普請手伝」¹³を勤める。俵有兵衛は承応3年(1654)に父の跡を継ぎ御大工頭となる。明暦大火後には江戸屋敷の「御普請御用」を勤める。その俵有兵衛は寛文11年(1671)に御大工頭を継ぐ。元禄10年(1697)に江戸城で「田安御殿普請手伝」を勤める。佐太神社貞享度造替では配置替え等注目すべき造営に関わるが、これを正神主勝部吉成は「竹内氏世稀ナリシ」¹⁴と評価している。享保3年(1718)には作事奉行を勤め役組外になる。奉行は享保18年(1733)に辞退するが、出雲大社延享度造替にも関わり「年来切者二有之者」として褒美を賜る。『竹内右兵衛書付』¹⁵を記したのもこの人物とされている。以降の代は士格で留守居番組、大番組等にあり、御作事所からは離れている。

上田作太夫¹⁶は元和年中に足輕並として仕え始めるが、寛永年中、松本で御大工となる。俵六太夫は明暦2年(1656)から御作事所に勤め始め、寛文6年(1666)に父の跡を継ぎ御大工となる。元禄6年(1693)に御目見御大工頭となり、延宝7年(1679)に御徒並御大工頭となる。佐太神社貞享度造替では竹内有兵衛と共に「御大工」¹⁷として携わるが、享保3年(1718)に留守居番組に入り士格になっている。その俵作太夫¹⁸は享保5年に御徒並元¹⁹とあり、元文2年に作事奉行¹⁹になっている。

上坂次郎左衛門は慶長6年(1601)、直政の父秀康の時代から足輕並として仕え、越前大野で御大工となる。俵次郎左衛門は慶安2年(1649)に御作事所に勤め始め、明暦元年に父の跡を継ぎ御大工となる。その俵杵兵衛は、貞享2年(1685)に御大工、元禄14年(1701)に御大工頭、宝永8年(1711)に御目見御大工頭、享保5年(1720)に御徒並元²⁰(杵兵衛に改名)となり、享保9年(1724)に目附に、享保19年(1734)に再び元²¹になっている。

馬場助右衛門は越前大野で足輕として仕え、出雲で御大工を勤める。俵助右衛門は承応2年(1653)親と入代わる。その俵助右衛門は寛文8年(1668)親と入代わる。以後しばらく記載がなく元禄6年(1693)御大工(4代目?)とある。また、しばらく記載がなく、享保9年(1724)に御大工(5代目?)とあり、享保19年(1734)には御目見御大工頭となっている。市之丞(後に助右衛門と改名、6代目?)は寛保2年(1742)に親と入代わり御大工、宝暦10年(1760)に御大工頭助ケ、明和4年(1767)に御大工頭となる。佐々右衛門(7代目?)は安永2年(1773)に親の跡を継ぎ御大工、寛政8年(1796)に御大工頭になり、寛政11年(1799)には、この『帳』を記している。²⁰

水谷五郎兵衛は越前大野では台所役人として仕え、出雲で御大工になっている。俵五郎兵衛は万治元年(1658)に御大工となる。その俵五郎兵衛は貞享4年(1687)に御大工となる。その俵五郎兵衛は元禄17年(1704)に親と交代して御大工に、正徳3年(1713)に御大工頭(勘右衛門と改名)となる。享保19年(1734)に徒目附内改小普請方頭取とある(以後不明)。

竹内小右衛門は元和元年越前姉ヶ崎で検皮方として召し抱え

られ、出雲で御大工となる。2代目伊助は承応2年(1653)に父の跡を継ぎ、検皮方を勤める。以後は『列士録』によると、寛文12年に御作事所役人となり宝永元年に逝去する(以下略す²¹が、表-3では同系の竹内権三郎以下の系譜も載せている)。

森川甚兵衛は越前大野で足輕並として召し抱えられ寛永15年(1638)に御大工となる。2代目甚左衛門は、承応2年(1653)に御大工になるが、宝永5年(1708)に「御大工滅し」とあり、家系は跡絶える。

2) 御大工並の召抱

『帳』をよく見ると、大工職の増員は主に御大工並の任用によっているのが分かる。ここでは、御大工並の召抱について検証し、松江藩における大工職の任用とその後の推移を明らかにしたい。

『帳』では、大工職が増員されたり、役職が変わる際に「見習」「被召抱」「被仰付」等と記される。「見習」の記載は御大工(並)の俵に限られ、「無給」で始まり、後に親と代り御大工(並)となるのが分かる。「被召抱」は御大工並に限って見られる。「御大工並(二)被召抱」と記載されているのは、正徳3年(1713)4人、享保3年(1718)7人が頭著で、元文3年(1738)1人、延享1年(1744)1人、宝暦13年(1763)1人、明和3年(1766)1人、安永8年(1779)1人である。この他の記載例を見る。「御大工並」のみの記載が享保16年(1731)1人、寛保2年(1742)6人である。「御大工並増」の記載は享保7年(1722)1人である。「御大工並被仰付」は元文2年(1737)2人、寛保3(1743)年1人、安永4年(1775)1人、明和2年(1765)1人、安永3年(1774)1人で、「御大工並勤被仰付」が安永3年1人である。ところで、御大工並から御大工に変わる場合には「被仰付」と記載されている。他の役職に変わる場合も「被仰付」と記される。これは役人や奉行の場合も同じである。

大工や役人が他の役所から、あるいは他の役所に変わる場合も「被仰付」と記される。一方「被召抱」は新たな雇用に際して使われているが、大工職の「被召抱」、つまり新たに雇われる場合に、御大工並から始まるのが分かった。

表-4は「御大工並(二)被召抱」とある大工について、召抱の年とその後の推移を示したものである。なお、寛保2年(1742)の「御大工並」と記載される6人については表-4の下欄に附記したが、彼等も前記「御大工並(二)被召抱」とその推移が相応しているところから、新たに任用された御大工並と見なすことができる。²²

3) 享保3年召抱の御大工並の推移²³

大工職の任用については前節でその特色を明らかにしたが、御大工並の召抱が特に顕著なのは享保3年(1718)である。ここでは、享保3年に御大工並に召抱られた7人を取り上げ、その系譜を辿り、松江藩における大工職の推移に見られる特色の一面を検証したい。

『帳』の享保3年の項の冒頭には「八重垣 伊丹堂 善光寺 御修復/新橋 両三枚橋 掛直シ」と作事物件が記されているが、この頃、御作事所の員数²⁴も多くなり、7人の御大工並を新たに召抱ることになったと考えられる。これら7人の系譜を辿ってみると、表-5²⁵のようになる。以下に個々の推移を辿ってみる。

井川源四郎は享保21年(1736)に御大工、寛保3年(1743)に御目見御大工頭になり、寛延4年(1745)に俵と入代わる。俵新之丞は親源四郎が御大工になる寛保3年に御大工見習として御作事所

表—4 御大工並の召抱とその推移

年 号	
元禄 16 1709	*町大工田鹿与市
宝永 8 1711	渡部徳右衛門
正徳 2	伊藤彦兵衛
3	▽並
4	▽並
5 1715	中村伊左衛門
6	▽並
享保 2	○大工
3	○大工
4	与惣
5 1720	井上清右衛門
6	▽並
7	伊藤四郎太
8	▽並
9	不相見(?)
10 1725	田鹿藤右衛門
11	▽並
12	山門吉郎左衛門
13	▽並
14	原田茂左衛門
15 1730	▽並
16	内藤安右衛門
17	▽並
18	野右衛門
19	☆頭
20 1735	☆頭
21	入代(22年)
元文 2	○大工
3	○大工
4	○大工
5 1740	岡吉兵衛
6	▽並
寛保 2	○大工
3	○大工
4	許築惣胆腹(29年?)
延享 2 1745	☆頭
3	☆頭
4	☆頭
寛延 2	☆頭
3 1750	☆頭
4	☆頭
宝暦 2	☆頭
3	☆頭
4	☆頭
5 1755	☆頭
6	☆頭
7	☆頭
8	☆頭
9	☆頭
10 1760	☆頭
11	☆頭
12	☆頭
13	☆頭
14	☆頭
明和 2 1765	☆頭
3	☆頭
4	☆頭
(御立派)	☆頭
5	☆頭
6	☆頭
7 1770	☆頭
8	☆頭
9	☆頭
安永 2	☆頭
3	☆頭
4 1775	☆頭
5	☆頭
6	☆頭
7	☆頭
8	☆頭
9 1780	☆頭
10	☆頭
天明 2	☆頭
3	☆頭
4	☆頭
5 1785	☆頭
6	☆頭
7	☆頭
8	☆頭
9	☆頭

補記：「被召抱御大工並」以外の「御大工並」

- ・「御大工並」のみ
- 享保 16 田鹿藤吉 → ?
- 寛保 2 内藤連太 → 宝暦 3 御大工
- 岡彦七 → 宝暦 3 入代り
- 上村長太夫 → 寛保 3 入代り
- 井上徳左衛門 → 宝暦 3 御大工
- 安藤兵八 → 寛保 3 減し
- 井上藤四郎 → 宝暦 2 減し
- ・「御大工並増」
- 享保 7 伊藤與次兵衛 → ?
- ・「御大工並被仰付」
- 元文 2 伊藤与次兵衛 → 延享 5 御大工
- 井川太郎兵衛 → 延享 5 御大工
- 寛保 3 山門吉郎 → 寛延 2 御大工
- 明和 2 親兵八郎 安藤源太 → 明和 4 減入
- 安永 3 木村庄吉 → 病死跡断絶
- ・「御大工並勤被仰付」
- 安永 3 安藤喜与(代)七 → 天明 3 御譜代格御大工
- ・「年来御作事棟梁出精二付御大工並被仰付」
- 安永 4 中村藤右衛門 → ?

※1 「月照寺本堂上葺御修復御大工頭」並びに「月照寺建立御大工頭」

御大工数 (左：御大工頭 右：御大工)

記号の内容

- ▽ 「御大工並被召抱」
- ◇ 「御譜代格御大工二被仰付」
- 「御大工被仰付」
- 「御目見御大工被仰付」
- ☆ 「御目見御大工頭被仰付」
- ★ 「御徒並御大工頭被仰付」

下欄 () の数：勤めの年数

川端初右衛門

一宮勘右衛門

*棟梁

▽並

減入

出勤(?)

○大工

小林安左衛門

▽並

入代

(3+21年)

◇譜代

(11年?)

に勤めはじめ、寛延 3 年(1750)に親に代わって御大工になり、同時に名を源四郎と改め、宝暦 6 年(1756)病死とある。その倅次郎吉は同 7 年(1757)に御大工に、同 9 年(1759)に源四郎と改め、明和 4 年に官七と改名し御大工普請所勤となり、安永 6 年(1777)に江戸勤(この時、伊祖助と改名)、安永 9 年(1780)に江戸より帰り、天明 5 年(1785)に御破損方支配御大工頭になる。天明 6 年以降の『帳』にはしばらく名が見えないが、寛政 2 年以降、徒並御

破損方御大工頭として名が再び見えている。なお井川姓には他に太郎右衛門、嘉兵衛、善右衛門等の名が見える。

田鹿藤右衛門は享保 14 年(1729)に病死とある。翌 15 年(1730)に御大工並藤右衛門跡として田鹿藤吉の名が見えるが、同 16 年(1731)には「減し」とあり、以後、田鹿姓は見えない。

伊藤四郎太はこの年に朱で「相不見」とあり以後の動向は判らない。同姓の伊藤与次兵衛が元文 2 年(1737)に御大工並となり

表-5 享保3年召抱御大工並の系譜

年号	井川源四郎	田鹿藤右衛門	伊藤四郎太	井上清右衛門	原田茂左衛門	山門吉郎左衛門	内藤安右衛門
享保 2	並	並	並 (不相見)	並	並	並	並
4							
5							
6			(與次兵衛)				
7			並		(和左衛門)		
8			不相見		滅し		(野右衛門)
9	並	並		並	並		並
10				滅し			
11							
12							
13							
14		病死					
15		並 (田鹿藤吉)					
16		滅し					
17							
18							
19							
20							
21	大工		並 (与次兵衛)			大工	大工
元文 2		(太郎右衛門)					
3		並					
4							
5							
6							
寛保 2	↓目見頭	大工 (喜兵衛)		(平右衛門)		(平六)	(連太)
3	見習 (新之丞)			(徳左衛門)		見習	並
4				並		並	
延享 2			大工へ	3人扶持			目見頭
3							(野八)
4							並
5		大工					
寛延 2			見習 (團助)				
3	大工 (源四郎)						
4	入代	(嘉平次)					
宝暦 2		見習			滅し (源左衛門)		
3							
4			3人扶持	大工			
5							
6	病死						
7	大工 (次郎吉)						
8							
9	(源四郎)						
10				新様方 (重左衛門)			新様方
11							
12	大工 (保助)		大工?	月照寺御大工			↓月照寺、圓隆寺頭
13	見習 (廣太)		並				(山門御場所詰)
14			大工				
明和 2						頭小算用	小算用
3							(丈右衛門)
4	(官七)	(繁右衛門)	(彦六)			徒並	頭手傳
(御立派)						佛改	大工家業指南
5							頭見習 (丈三郎)
6							
7	添元					内改兼	頭本役之心得
8	頭			大工本格 (徳左衛門)			
9	江戸頭					内改別当	
安永 2	江戸頭		江戸 (与次兵衛)			添奉行	徒並
3							↓2人扶持
4	江戸 (伊祖助)						内改
5	江戸 (伊祖助)						
6	江戸 (伊祖助)						
7	江戸		目見				
8	江戸						
9	江戸						
天明 2	江戸 (善右衛門)		(新助)	(次助)			江戸 (三右衛門)
3			見習	見習			
4			見習 (團助)				
5	頭	徒並	見習 (團助)				
6	?		目見				
7	?		大工動				
8	?	内改別当兼	頭				
9	?						
寛政 2	破損方	徒		頭格			
3	?	内改別頭、頭		大工加勢			
4							
5							
6							
7	破損方		徒並	大工			
8			(勇太)				
9			小算用大工動				
10			(勇吉)				
11							
享和 1							
2	頭			目見頭			破損方頭

以後家系は3代に渡って継続しているが、伊藤團助は延享5年(1748)に御大工見習となり、宝暦12年(1762)には親に代わって御大工並に、翌13年(1763)には御大工となり、さらに、天明4年(1784)には御大工頭雇に、同8年(1788)には御大工頭になり、寛政7年(1795)には御徒並になっている。

井上清右衛門は享保11年(1726)に「滅し」とある。その後

は同姓の井上徳左衛門が寛保2年(1742)に御大工並になり、宝暦3年(1753)に御大工に、宝暦12年(1762)の月照寺²⁶本堂上尊御修理では4人の御大工の一人で、明和4年(1767)に伴重左衛門と入代わりとなる。徳左衛門の伴平右衛門は寛保3年(1743)に三人扶持で見習(?)となり、宝暦11年(1761)にはすでに御大工になり、月照寺修理でも御大工として名を連ね、明和4年に親と入代

わり（この年、重左衛門と改名）、明和 5 年に三丸瓦屋根方勤となり、明和 9 年(1772)に御大工本格（この年、徳左衛門と改名）を仰せ付けられ、寛政 3 年(1791)に御大工頭格となっている。

原田茂左衛門は享保 8 年(1723)に「滅し」とあり、以後、田原姓は見えない。

山門吉郎左衛門は元文 3 年(1738)に御大工、宝暦 7 年(1757)に隠居し、倅三郎左衛門と入代わる。倅三郎左衛門は宝暦 6 年(1756)に見習となり、同 7 年に入代わり御大工となり、同 12 年の圓隆寺²⁷本堂建立でも御大工として名を連ねている。明和 4 年には御大工御普請所勤、寺院方普請所勤兼とあるが、安永 2 年(1773)には小作事添元²⁸御大工頭兼となり、同 5 年(1776)に小作事添元²⁹御免、天明 3 年(1783)に江戸勤番（三右衛門と改名）、同 6 年(1786)に帰国し御大工頭となり、御徒並になっている。寛政 5 年(1793)に吉郎左衛門と改名、寛政 9 年(1797)に病死する。その倅兵藏は安永 7 年(1778)に御大工見習となり、天明 7 年には御大工頭加勢に、寛政 3 年(1791)に御大工頭加勢・御普請所勤、寛政 9 年に跡を継ぎ御小算用大工頭勤となっている（享和元年以降は不明）。

内藤安右衛門は元文 4 年(1739)に御大工となり、寛保 4 年(1744)に御目見御大工頭に、宝暦 4 年(1754)の御徒並御大工頭に、明和 4 年(1767)に御免となっている。倅連太は寛保 2 年(1742)に御大工並となり、宝暦 3 年(1753)に御大工に（この年、領助と改名）、宝暦 12 年(1762)の月照寺本堂上葺御修理と圓隆寺本堂建立では御大工頭となり、同 14 年(1764)に小算用に、明和 4 年に御大工家業指南となり、安永 3 年(1774)に御徒並、同 5 年(1776)内改、天明 3 年(1783)には士列御取立添奉行となってる。その倅丈右衛門は明和 3 年(1766)御大工頭手傳に、明和 7 年(1770)には御大工頭本役之心得となっている。

5. 御大工の位置付けとその推移

御作事所には、まず組織を統率する作事奉行とそれを補佐する添奉行が置かれ、その配下には、事務（計吏）系として調役、内改、横目、元³⁰、役人等が置かれ、技術系として御大工頭、御大工、御大工並（譜代格御大工）、御左官等が置かれ、それらを助ける役職として城普請、小夫等が置かれたが、それらの陣容は天明 6 年当時およそ 70 名であった。

御作事所における御大工の位置付けと任務について述べる。

役職と格式は不可分に対応している。大工職は徒以下の卒分で、奉行、添奉行になって士分になる。御大工を中心にその推移を見ると、御大工から御大工頭、添奉行、中には本奉行へと昇格する者がある。

御大工は御作事所の普請所勤めが主体であるが、破損方、寺社修理方等も併置されている。

江戸での勤めも重要な任務で、添奉行、大工頭、御大工等は交互に「江戸勤番」になっている。

これらのことから、御大工は優れた技倆を持ち、統率力のある者が求められていた。また、御作事所は御大工を重用した組織であり、御大工を中心とした職能集団であったことが分かる。

御大工の任用とその推移については次のような特色が見られた。徳川家康の庶長子結城秀康の第三子・松平直政は、寛永元年か

ら 10 年間越前大野を領し、寛永 10 年から松本、寛永 15 年から出雲国を領するが、寛永 15 年召抱御大工 7 人はいずれも越前が生国であり、大野時代に直政に（上坂氏は秀康の代から）仕えた足軽であった。前藩主に仕えていた家臣にも作事に長けた武士（例えば寛文の杵築造営の大奉行になった岡田半右衛門等）がいた筈だが、直政は、松江入府の際、御作事所設営に当ってはそれまで仕えた家来（足軽）で固め、城郭や城内の殿館等の修覆造営整備に当たらせようとしたことが分かった。

正徳以降、御大工の任用は御大工並を召抱ることによって行われることになる。御大工並の召抱とその推移は多様である。町大工や棟梁から御大工（並）になる例がいくつか見える。田鹿与市は町大工だったし、小林安左衛門も大工町に住む大工²⁸だった。技倆が備わっておれば町大工や大工棟梁からの御大工（並）への登用もあり、また、力と働きのある大工は御大工並から御大工、そして御大工頭となり、それに相応して格式も高くなっていった。御大工並の召抱とその推移を見ると、松江藩では、大工職の任用や登用が、大工の技倆や働きに応じて行われる場合が多々あったことが伺える。

享保 3 年に召抱られた御大工並 7 人の系譜を辿ってみると、田原茂左衛門のように短命な者、内藤安右衛門（後、野右衛門と改名）のように倅が受け継いで添奉行にまで昇進する家系まで、その推移は個々の大工職によって異なっていることが分かった。

なお、松江藩においては子々孫々まで伝わる大工職の系譜は馬場助右衛門の家系以外には確認できなかったが、それでも、『帳』を辿ることによって竹内有兵衛を初めとしてして特筆すべき御大工の存在が確認できた。

6. おわりに

本研究は、江戸時代における地方の作事組織の実態と組織形態の特色を考察することを目的としている。本稿では、『帳』により藩政時代の主要な期間（寛永 15 年～享和 2 年）における作事組織の実態を御大工の系譜を中心に検証してきた。御大工の系譜を辿ることによって御作事所における御大工の位置付けと推移を明らかにすることができた。

また、松江藩御大工の中には特筆すべき御大工の系譜が何人か見られる。竹内有兵衛、上田六太夫、上坂次郎左衛門、水谷五郎兵衛、竹内久右衛門、山門吉四郎、斎田彦四郎、安藤喜代七等の系譜については『列士録』も存在するところからいずれも卒分から士分になった家系であることが明らかになった。

なお、『帳』に加えて『列士録』等の史料をよく見ると、例えば、斎田彦四郎については、御天守の模型を作ったり、城内分限絵図を差し出し²⁹ているし、安藤喜代七は江戸下屋敷大崎³⁰の普請に関わったりしたことが推察できる。今後は、特筆すべき御大工の活動とその系譜をさらに詳しく検証すること、さらには、これら御大工の活動内容を詳しく調べ、御大工が関与した作事等についても検討を加えることを課題と考えている。

補記

本研究の基礎史料である『帳』であるが、所有者である野津隆氏には、史料の閲覧並びに複写で御協力いただいた。また、『下

按』、『列士録』等の調査では島根県立図書館郷土資料室にお世話になった。ここに記して謝辞としたい。

なお、本稿は平成9～12年度の科学研究費助成による研究成果の一部としてまとめたものである。

注記

¹ 『御作所御役人帳』は昭和16年に刊行された『松江市誌』の編集作業中に収集され、現在は編者野津清一郎の遺族野津隆氏によって保存されている。

² 拙稿：松江藩御作所の構成とその推移—松江藩御作所と御大工の作事に関する研究 その1—,日本建築学会計画系論文集 No.504,211-217, Feb.,1998.

³ 本章は拙稿：松江藩御作所の人員構成ニツイテ—松江藩御大工の研究 その3—,日本建築学会中国支部研究報告書 第22号,1999-3.

⁴ 国文学研究資料館史料館蔵「雲州松平家文書」の内の一つ。島根県立図書館には同史料のマイクロフィルムが存在する。『旧藩事蹟調査下按五ノ拾壹』では「①宗門奉行、②勘定奉行勝手方、③京都及大坂御留守居、④隠州郡代、⑤郡奉行、⑥人參方・木実方奉行、⑦御船奉行、⑧御納戸役、⑨御花畑奉行、⑩御普請奉行、⑪御作事奉行、⑫御臺所奉行、⑬御礼座奉行、⑭御軍用方添奉行」と14項目について記されている。

⁵ 本章は拙稿：天明6年松江藩御作所の構成と御大工の動向—松江藩御大工の研究 その4—,日本建築学会大会学術梗概集(中国)1999,9. 55-56. に加筆修正を施したものである。

⁶ 天明6年の『帳』に小夫の数は記されていないが、前後の『帳』を参照に6名とした。

⁷ 御作所の員数は藩政改革『御立派』によって御作所の員数は38名まで減少するが、以後、暫時増加する。前稿に記した「御作所の陣容とその推移」でその変化を記している。

⁸ この表は中原健次著『松江藩格式と職制』（松江今井書店、平成9年）等を参考に作成したものである。

⁹ 島根県立図書館蔵：同様の史料として『列士録』以外には、『列士録新番組抜取帳』、『列士録断絶帳』がある。

¹⁰ 本章は拙稿：寛永15年召抱御大工とその子孫の系譜—松江藩御大工の研究 その1—,日本建築学会大会講演梗概集(近畿),1996-9 に加筆修正を施したものである。

¹¹ 史料により宇兵衛、右兵衛との記載もあるが、ここでは有兵衛に統一する。但し『竹内右兵衛書付』についてはそのまま表記した。

¹² 『列士録』には「於江戸御出入奉公」とある。

¹³ 『藩主事蹟』には「公江戸西の御丸御普請御手傳の命を蒙られ、(慶安二年)九月二十六日手斧始めあり、時に岡田信世御普請の大奉行たり」とある。

¹⁴ 『佐太神社貞享四年指図板』（島根県立博物館蔵）に記されている。

¹⁵ 『竹内右兵衛書付』は縦7.5cm、横15.6cm、紙数114枚からなる和綴本である。内容は(1)略年表4枚、(2)家相之部4枚、(3)武家之部65枚、(4)松江城廓実測之部24枚、(5)奥書1枚に分かれており、特に松江城廓に関する記述は重要で松江市保護文化財に指定されている。

¹⁶ 『帳』には3代目までしか記載されていないが、『列士録』によると、以下の通りである。4代目伴兵衛は正徳2年(1712)に御作所見習となり、享保7年(1722)に父の跡を継ぎ御徒並となり、元禄、横目役を勤める。5代目伴兵衛は元文元年(1736)に小算用となり御作所から離れる。以下は『列士録』によるが、6代目武太夫は安永5年(1776)に御徒並となり、文化6年(1809)の出雲大社修葺、その後「若殿様御殿普請」にも携わり、文政12年(1829)には士格になっている。

¹⁷ 佐太神社貞享四年建立棟札には「御大工 上田六太夫 竹内宇兵衛」と並記されている。

¹⁸ 『列士録』によると、3代目作太夫は享保10年(1725)に父の跡を継ぎ留守居番組に組入し、元文2年(1737)には作事奉行となる(延享3年まで)。

この間松江大橋の普請、出雲大社の延享度造替で出精し褒美を賜る。4代目作太夫は父の跡を継ぎ士格として大番組に組入する。5代目友之助は新藩士(卒)に戻っている。その後は不明。

¹⁹ 『列士録』には元文2年に「御作事奉行被仰付役組外(後略)」とあり延享2年に「(前略)御作事奉行後上御免 勤之年数十ケ年 大番組組入」とある。

²⁰ 『帳』は寛永15年から享和2年までの作事所の変動を記した史料であるが、最初から最後まで名が見えるのは馬場姓だけである。このことから馬場氏は生きの長い御大工の家系であったことが分かる。

『帳』の「寛政十一未年」の末尾に「右之通御座候以上 未正月 馬場佐々右衛門 江角新蔵」とあるが、当年、馬場佐々右衛門は御大工頭筆頭、江角新蔵は御役人筆頭である。

²¹ 『帳』には元禄8年に御役人竹内伊助の名が確認でき、『帳』には元禄8年(1695)から御作所御役人、元禄6年(1695)に御目見となる。3代目伊助は元禄2年御作所見習に、同11年に父の跡を継ぎ御役人となる。4代目小太夫は正徳3年に御料理方見習となり、以来台所方に勤め、延享2年に士格となり、宝暦12年から御台所奉行を勤める(安永4年まで)。

²² 「御大工並」の呼称であるが、『帳』では天明3年以降は「譜代格御大工」と名称が変わっている。

²³ これは拙稿：享保3年召抱の御大工並の推移—松江藩御大工の研究 その6—,日本建築学会大会学術梗概集(東北)2000,9. 55-56. に加筆修正を施したものである。

²⁴ 享保3年の員数は100人で前年より30人増加している。その内小人が11人から31人に、御大工が11人から15人になっているのが顕著である。

²⁵ 一部に空白部分があるが『帳』に記載されていないためである。

²⁶ 松江藩主の菩提寺で初代直政はじめ藩主の霊廟がある。

²⁷ 歴代將軍の霊位が安置されている寺院で、松江藩では清水寺や鰐淵寺と同格に扱われていた。

²⁸ 『松江八百八町 町内物語＝白濁の町＝』（同書編集協会編,S30年3月）に記されている。また、小林安左衛門は松江藩の名工小林如泥の親である。

²⁹ 『列士録』には「同(享保三)年月日不知天守小形椿(後略)」「同(享保)五庚子年三月日不知御城内分限御繪圖被 仰附出来差出(後略)」とある。

³⁰ 大崎下屋敷は松平不昧が営んだ独楽庵を始めとする茶室建築や数寄屋建築でも著名であった。

(2000年8月29日原稿受理、2001年1月15日採用決定)